

登山研修所—これからの展望と課題—

登 山 技 術

松 本 憲 親

これからの登山研の指導・研究の両輪が協調して回る時、日本のみならず世界の登山界に新風を送ることになろう。

先鋭的登山はより高度な登山技術を要するものとなり、フリークライミングでは5.15が登られるであろうし、アルパインクライミングではより困難な高所のミックス壁の登攀が敢行されよう。その技術の核心は登攀力と防御の技術であって、共により高いものがあるからこそより困難な目標が達成されるものと言わねばならない。すなわち登攀力と防御の技術は革新され続けるものと言える。その防御の技術こそは永年登山研が指導の中心に据えて来たものであり、研究体勢が成熟した今日「防御技術革新」の機が満ちたと言えよう。8,000mの順応技術は大きく変わったようで（尾形、本誌、12号、123頁）、ロブ・ホール隊の最期のサガルマータの順応法もこれで納得できるが、これで完成したのではなく、必ずより良いものへと変わって行く。

筆者はこの年末年始の山行で鹿島槍へ行った。30日未明、天狗の鼻B.Cを発し最低コルから、荒沢奥壁北稜を目指して下降開始せんとし、傍らの径0.3m程のダケカンバにダイニーマのロープをフィックスするべくこの秋の遠征隊員4名に「ターバックで結んでくれ」と注文したが誰一人ターバック結びができなかった。そんな結び方がなぜ必要なんですという向きにはケプラーやスペクトラ（ダイニーマ）では、もやい結び（ボウラインノット）や8字結びの結索残存強度が約30%に過ぎないことを知ってもらわねばならない。フィックスロップとして一般的に使われるP.Pもおそらくこの程度と推定される。すべからくターバックやエバンスで結び、カラビナとの接触角を約700°（2回回っている）とする。ということはこれまでヤバイことをやって来たということに気づくはずだ。このようなロップの中間に結び目を作ってピトンに止めるには8字結びはいけない。変形蝶結び（蝶結びをしてもう一度目に手を通す＝末端処理の基本となろう）が結び目の強度が大きい。

こんなことは教科書に書いてあるのでなく筆者が考えついたことで、このような改良をこれまでの技術にどんどん加えて行きましょう。改良された進んだ技術を集結し、それを実地に指導し結果を研究に反映する。登山研は研究と直結している最先端の指導機関とも言える。

よい用具の開発も急務のことである。例えば、画期的なスノウアンカーを開発してスピードアップと同時に安全性の向上に役立てねばならない。簡便な積雪テスト用具も開発したい。

コンテニューアスクライミングの技術もやはり改良されねばならないと筆者が言うだけでなく多くの登山研関係者諸兄に関心を持ってもらわねば改良は進まない。

5. 文部省登山研修所創立30周年記念特集

雪上のアンカーの強度測定はロードセルの不調でなかなか進まないが、扱いにも慣れて来た頃で、今年には正確なデータが十分取れるよう期待している。

終わりに再度登攀力に触れますが、上記の荒沢北稜核心部で2人がロープにしぼしぼぶら下がりました。フリーで5.11をレッドポイントする位の方ではアルパインクライミングは出来ないようで、途中で追い抜いて行った橋本、安東パーティのように「どこが核心部かと思ううちに終わっていました」と言える; 5.12を何本も登れる位の力が欲しいものである。山野井は5.13だったが、「アルパインクライマーに5.12以上を」もキーワードに加えて下さい。

(岳僚山の会)